資料１

長崎大学熱帯医学研究所附属アジア・アフリカ感染症研究施設ケニアプロジェクト拠点内の新研究ラボ 「汎アフリカ感染症研究 Hub」概要

【背景】

国立大学法人長崎大学は、国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）の『医療分野国際科学技術共同研究開発推進事業・アフリカにおける顧みられない熱帯病（NTDs）対策のための国際共同研究プログラム*』により、2015 年からケニア中央医学研究所 （KEMRI)と共同で研究開発を実施している。

*本学が行う研究の課題名：アフリカの NTD 対策に資する大陸的監視網に向けたイノベーティブ・ネットワークの構築：一括・同時診断技術を基軸とした展開

本研究開発は、一括・同時診断技術を用いたアフリカの大陸レベルでの NTD サーベイランスの構築とそのネットワーク化を目指しており、以下のことを目的としている。

1）研究開発をケニア国内で実施してアフリカに拡げること

2）人材育成と情報共有のためのネットワークを形成すること

今回オープンした「汎アフリカ感染症研究 Hub （Pan African Hub for Infectious Diseases Research）」は、研究開発･人材育成をさらに促進する事を目的として設置された。

【目的】

本 Hub では、顧みられない熱帯病などの感染症の診断技術に関する研究開発の実施や、感染症サーベイランスに関しての技術と情報の交流・発展を目指すアフリカ・ネットワークの構築、さらには、フィールドから分子レベルまでの疫学研究を実施するとともに、それらの研究開発活動を通じた若手研究者の育成を目指す。

【施設建築と機材整備について】

本施設の本棟は、AMED の支援により 2016 年度に建てられ、顧みられない熱帯病の一括診断技術の開発ラボとして整備が行われてきた。

また新棟については、本 Hub の目的に賛同したスイスのロシュグループ（Roche）、クリントン・ヘルス・アクセス・イニシアティブ、 アボットラボラトリー、アメリカ合衆国国際開発庁（USAID）による寄附･出資により建築と整備が行われた。この度、新棟が完成したことにより全棟が揃い開所式を行った。

さらに Roche からフルオートメーション化されたハイスループットの遺伝子検査システム（Cobas®8800）が寄贈され、新棟内のラボに設置される。本棟に設置された設備・機器と合わせて、今後アフリカを引っ張る最先端の感染症研究活動の展開が期待される。

施設の見取図